集刊東洋学 第一一四号 平成二十八年一月 四八―六六頁

五代洛陽の張全義について

――「沙陀系王朝」論への応答として――

山根直生

はじめに

五代後唐以降の四王朝、さらには北宋を加えて「沙陀系王朝」と呼ぶ展望が提示されている（森部二〇一〇、二三九～二四〇頁）。漢人の支配者を擁し漢人のプロト・ナショナリズムを形成したと見なされ、「宋型文化」との類型化もなされた宋朝・宋代（妹尾一九九七―A、四〇六～四一三頁）に対する劇的な史観の転換であるにも関わらず、宋代史研究の側からの反応は概して鈍い。筆者は宋代というよりも五代十国期、あえていえば唐宋間の歴史過程にこそ主たる関心を抱いてきたけれども、本論においては表題の一勢力をとりあげることで、この展望への応答を試みるものである。

そもそも後唐から後漢までについて沙陀族を中心とする勢力と見ることなら、何ら新奇なものではない。実際、「沙陀系王朝」論の画期性は沙陀族そのものについてというよりも、一部が沙陀族と合流していたソグド系勢力についての研究の進展に基づくものであり、そうした存在が北宋の外戚や国境周辺の戦力としても連続していたことの実証（石見二〇〇五、一三三～一三四頁、森部二〇一〇、二一一～二三四頁、など）こそが、特に重要かつ象徴的な成果であると言えよう。

しかし、こうしたソグド研究の進歩を支えた諸条件、とりわけ中国経済の発展下で出土した墓や墓誌銘などの新資史料は、ソグド系勢力に限ってのものであったわけではない。彼ら独特のソグド姓が、文献史料の再検討に際して明快な指標として働いた側面はあろうけれども、同時代の他の勢力についても同様の考察は可能なはずである。そして、これを課題とするなら、「沙陀系王朝」にも数えられていない後梁側の勢力に注目することが捷径であり、彼らと沙

陀・ソグド系勢力を並び置いて考察してこそ、唐宋間の歴史過程に関する充実した理解が得られよう。

また一方で、北宋までを「沙陀系王朝」と認める場合には、ではなぜ後周・北宋は契丹との対決姿勢をかかげ漢人・中華の守護者として――具体的・政治史的には、その領域内の地主の守護者として[1]――自ら任じたのか、という問題が浮上する。というのも従来この問いは、両王朝を先験的に漢人を中心とするものと解することで看過されてきたと思われるからである。鮮卑拓跋部に発して多民族的な「唐型文化」を育んだとされる唐朝と、沙陀族に発しつつ対称的に「漢人中心主義」的な「宋型文化」に至った北宋と、両者の岐路はいかなるものであったのか、特に後周世宗朝政治史[2]の再検討が求められるはずである。

以上、「沙陀系王朝」論への応答のためには、梁・周という五代における首尾両極の王朝への考察に捷径が見出されると考え、本論ではその前者、後梁時代について探るものである。

しかし後梁への考察には元来独特の困難がともなう。「沙陀系王朝」論ならずとも認めるように、後唐～後漢の三朝は明確な連続性を持っており、それらで執筆・編纂された史料では、後梁は後唐太祖李克用の敵対者として当然に悪評を被っている。さらに『旧五代史』の散逸によって、『永楽大典』所引部分からの再構成をへた現在でも、同書の「梁太祖本紀」は特に欠落がはなはだしい（陳二〇一一）。またそもそも後梁太祖朱全忠は、黄巣配下から唐朝に寝返って「全忠」の名を賜り、あげくその簒奪者となった人物であった。伝統的な王朝史観と近現代中国の農民戦争・革命史観の双方から、二重の否定的評価を下される彼とその王朝については、従来の歴史研究においても実態以上に貶められてきたと考えるべきだろう（佐竹一九九二、四八三頁）。

こうした困難を克服するため、本論で筆者が注目するのは、朱全忠らと密接な関係を結びつつ後梁の滅亡後も存続した勢力、洛陽の張全義である。彼による洛陽の復興を語る張齊賢『洛陽搢紳旧聞記』巻二、「齊王張令公外伝」（以下、「齊王外伝」と略記）をまず引用しよう。

（張全義が）澤州に在ること久しからずして洛陽の長官となった時（八八七年）[3]、洛陽は戦乱の直後で、県は荒廃して雑草がしげり白骨が野をおおっていた。外には人が絶え、洛陽城の中はことごとく焼き討ちにあっていた。最初は黄巣が（八八〇年）、続いて蔡州の賊が（八八四～八八七年）襲ったのである。そこで三つの小さな州城を築き、住民をまもりあつめて、盗賊からまもった。洛陽に到着した時の配下は百余人、

州の中で残っていたのはわずかに百戸、ともに中州一城をまもった。洛陽には今に至るもなお南州・中州というよびながある・・・

張全義が洛陽に到着すると、配下の百人から適格者十八人を選び、これに命じて屯将とした。ひとりずつに一旗を給し、たてふだを道にし、もとの十八県で農民をまねいて耕させると、流民がしだいにあつまってきた。張全義は百人からまた適格者十八人を選び、これに命じて副将とし、やってきた民をなぐさめた。

人を殺した者は死刑とするほかは、ただ杖刑を加えるのみで、重刑は無く、租税も無かった。流民の帰する者がしだいに多くなると、張全義はまた文書計算をよくする者を十八人選び、これに命じて屯の判官とした。一、二年しないうちに、屯ごとに千人を数えるようになった。

張全義は農閑期に男たちを選び、弓矢や刀槍を教え、動作や行進の仕方をしこんだ。これを行うこと一、二年、屯ごとの戸は増え、大きなものは六、七千、次ぐものは四千、それ以下は二、三千で、男たちの農閑期にたたかえるものは二万余人となった。盗賊がくればたちまちとらえ、刑は簡略にした。遠近から帰する者で市場のようなにぎわいになり、五年のうちにゆたかさで知られた。ここで県ごとに県令と主簿を任命した。・・・

（張全義は）秋のみのりを観るごとに、よい田の草の無いものを見ると必ず田のほとりで馬を下り、賓客にこれを観せ、田の主を召してこれを慰労し、これに衣物を賜った。もし禾の中に草が有って地のよく耕やされていないものを見ると、たちどころに田主を召し、衆を集めてこれを杖責した。もし苗が荒れて地も手入れされていないと、これをといつめ、「牛が疲れている」とか「耕やしたり草刈りしたりする人がいない」と民が訴えると、則ち田のほとりで馬を下り、たちどころにその隣人を召してこれを責め、「このものには人も牛もない。どうして衆はこれを助けないのか」といった。隣人が皆な罪に伏すと、即ちこれを赦した。これより洛陽の民は遠かろうと近かろうと、民の牛を欠く者にはあいついでこれを助け、人のいない者にも亦たそうであった。農民の男女はともにはげみ、農耕と養蚕につとめることを務めとした。このために家々は蓄えを有し、水害・干害にあっても民を飢えさせることは無かった。

以上、誇張された農本主義的美談とも見えるけれども、張全義やその子孫が政治的危機に陥る度、洛陽復興の功に

基づく助命嘆願が周囲から出されることを見ても[4]、まったくの虚構ではないことは明らかである。新旧五代史のその伝[5]によれば張全義は、八五二年生～九二六年没、濮州臨濮県の農民の出身で、もとの名は張言または張居言、字は国維という。県の役務から逃亡して黄巣の乱に参加、黄巣政権（八八一～八八四）下では水運使となり、その敗滅に前後して河陽三城節度使の諸葛爽の下に転じる。八八六年の諸葛爽の死後には独立して懐州・洛陽などによりつつ、近隣の李罕之・朱全忠・李克用といった軍事的に強力な勢力と次々に協力関係を結び、彼らの兵站を支えた。このような、騎射の戦闘力から評価される沙陀・ソグド系とは一見して異質な張全義一党の歴史的役割は、佐竹靖彦氏によって北宋にまで続く「各地と中央をつなぐものとしての文臣官僚制の起点」とも評されている（佐竹一九九二、五二〇～五二三、五二九頁）。梁唐の交代をも生き延びた故か、複数の墓誌が残されている彼らへの考察によって、後梁時代の一側面を探ることとしたい。

編纂史料から見る張全義一党の概要

では従来、この集団についてどのような研究があっただろうか。最も関連深いはずの洛陽の都市史研究では、隋唐時代史を中心とする関心のあり方に影響されてか、多くが簡略な記述にとどまる（蘇一九八九、三〇六～三四七頁、など）。新出墓誌の出土報告や墓誌史料集に付された考察（李・張一九九三、など）は、筆者も大いに参考としたものの、複数の墓誌の内容を関連付けるには至らぬ点が惜しまれる[6]。墓誌史料の活用を目指す本論においても、まずは既存の編纂史料から知られるところを概観しよう。

表1と新旧五代史の張全義伝から考えれば、その動向は、洛陽を占拠して以降大きく三期に区分するのが妥当と思う。まず、復興を独自に進めた九〇三年までが第一期である。唐昭宗の末年に洛陽への遷都事業を開始した九〇四年に始まり、後梁政権下で河南尹・天下兵馬副元帥・魏王となり「名位の重きこと、中外に冠絶」（『旧五代史』巻六八、崔沂伝）したという九二三年までが第二期である。そして以降が、後梁を滅ぼした後唐の下で生き延びながらも、仮子張繼孫を謀反の防止のために切り捨て（『冊府元亀』巻九三四）、自らの意向によらずして就任した河南県令羅貫と対立するなど（『旧五代史』巻七一、羅貫伝）、その権勢に綻びを広げていく第三期、である。

張全義の死によってこの第三期が締めくくられた後、その子孫の動向は史料も少なく、精彩を欠く。そもそも張全義自身、先述の屯田兵的施策のみならず農民の相互扶助を

表1　張全義一党と洛陽の動向

	年	月、洛陽および張全義勢力の動向（主として『資治通鑑』各年各月条による）
第一期	～	～
	886年	10月、河陽節度使諸葛爽、死す。大将の劉経・張全義、爽の子の仲方を留後とす。
	887年	06月、張全義、「蔡賊」の孫儒を駆逐し、洛陽を占拠。
	888年	02月、張全義、河陽の李罕之と対立、河陽を奇襲し占拠。03月、李克用の助勢を得た李罕之に対し、河陽で籠城。朱全忠に救援を求める。04月、朱全忠の助勢で勝利、以降、その兵站を支える。
	890年	07月、朱全忠の指揮下で澤州方面へ派兵。
	896年	09月、朱全忠とともに洛陽遷都を提言（実現せず）。
	901年	10月、朱全忠、洛陽へ幸することを請う。
第二期	904年	正月、朱全忠、洛陽遷都を請う。遷都事業、開始。02月、「宮室未成」。昭宗、陝州に留まる。04月、朱全忠、「洛陽宮室已成」と奏す。昭宗、洛陽へ。張全義、天平節度使に。10月、昭宗、殺害される。張全義、来朝し、河南尹兼忠武節度使に。
	907年	04月、後梁建国、洛陽は西都に。張全義、宗奭と賜名される。05月、魏王に。
	908年	12月、後梁、洛陽に遷都。
	910年	08月、張宗奭、西京（洛陽）留守に。
	911年	07月、朱全忠、張宗奭の私第（洛陽会節坊）に避暑。09月、張宗奭、西京留守に。某月、洛河堤堰の改修のため「百姓園林」を伐採した軍士の不法を朱全忠に上奏（『旧五代史』巻19、胡規伝）。
	912年	07月、張宗奭、国計使となり、もと建昌使の金穀に関する権限をひきつぐ。
	917年	12月、張宗奭、天下兵馬副元帥に、さらに西都留守に。
第三期	923年	10月、後梁滅亡。後唐荘宗、開封入城。張宗奭、来聴し、名を全義に復す。荘宗の皇子・皇弟から兄事を受ける。11月、張全義、洛陽遷都を請う。洛陽に遷都。張全義、洛陽での南郊を請う。守尚書令に。
	924年	06月、張全義の実子張繼祚、仮子張繼孫の反乱計画を訴え、誅殺に至らす（『旧五代史』巻32、荘宗本紀六、同年六月戊子）。12月、張全義、劉皇后から父事を受け、齊王に改封（『新唐書』張全義伝）。
	925年	08月、張全義、河南令羅貫と対立、劉皇后を通して讒言し杖殺に至らす（『旧五代史』巻71、羅貫伝）。
	926年	03月、張全義、李嗣源の反乱に憂苦して死す。04月、諸軍、洛陽で略奪す。李嗣源、入城し、即位す（唐明宗）。
～	937年	07月、張繼祚、反乱に荷担して妻子とともに誅殺されるも、張全義の洛陽復興の功により、族滅を免れる。百官、開封へ。
	938年	10月、開封へ遷都（東京開封府）。洛陽は西京に。

【洛陽・開封の政治的地位の変遷については、久保田2007も参照した】

奨励するパフォーマンスなど、「親民官」の鏡のごとき逸話には事欠かぬものの、一方で刑法に疎く、「凡そ百姓 詞訟有らば先に訴う者を以て理を得ると為し、是れを以て人 多く枉濫」したという（『旧五代史』張全義伝）。後梁政権下で「京畿に専制」した時期にも「河南・洛陽の僚佐、皆な其の門下由りし、全義に事えること厮僕の如し」とされるなど（『旧五代史』巻七一、羅貫伝）、畢竟その集団は同族経営的なものであった。唐末、崩壊した地方行政機構を洛陽という局所で補完するには有利であったその特質は、社会的復興と官僚制度の整備が進むにつれ、限界性を露呈していったのだと言えよう。

次に、その軍事面について。朱全忠らとの協力関係を第一義

とした彼らにおいて、この面の史料は乏しく、直接的な軍事行動は第一期の事例しか見出せない。八八八年二月の李罕之との対決について、河陽を奇襲した際の兵を『資治通鑑』は「屯兵」と記し、そこに付す注では「張全義、河南に尹たり、十八県各おの屯將を置き、以て屯兵を領す。屯兵、即ち民兵なり」とする（同書巻二五七、文徳元年二月。なお同書は以降『通鑑』と略記する）。また八九〇年、澤州へ派兵した際の兵数について、同書巻二五八、大順元年九月戊申の考異に引く『唐太祖紀年録』は、張全義・李重胤・鄧季筠三者の兵力を合わせて「七万」と記している。先の「齊王外伝」の記述でも、張全義が「二万余人」を動員できたのは、洛陽占拠の八八七年から流民の定着・軍事訓練をへた三、四年後と解されるので、八八八年の河陽での兵力が「屯兵」であったとはいうのは疑わしいけれども、八九〇年までには二万余程度のそれを整えていたと見てよいだろう。

これらを率いたであろう麾下の部将については、李罕之・李克用と戦い敗れた弟の張全武（『新五代史』張全義伝）の他、実子の張繼祚が若年において河南府衙内指揮使であったといい（『旧五代史』巻九六、張繼祚伝）、もと郝姓から仮子とした張繼孫にも「衙内の兵士を官せしめ」ていたという（『冊府元亀』巻九三四）。ただ、これら同族集団の他には桑維翰の父の桑拱が張全義の「客将」であった（『旧五代史』巻八九、桑維翰伝）というのみで[7]、異姓異宗の部将の姿が乏しいことは、表2に見る李罕之麾下の陣容と比較して顕著であり、これまた彼らの同族経営的特質を示すものと思う。

他方、張全義の最たる功績と言える民政面・洛陽の都市経営については諸史料でも言及され、宋都開封への連続性から唐末洛陽を論じた久保田和男氏によって具体化されている。氏によれば、唐末、本論の時期区分からいえば第一期における張全義の農業復興は、洛陽城内を農地として再開発する形をとっており、後唐に至るまで城内は官庁などの都市施設と菜園・田地が混在する状態にあった（久保田二〇〇七、五九～六二頁）。遷都事業、すなわち本論でいう第二期の活動においても、長安の「宮殿・官衙・民居などが解体され、用材は渭水から黄河に下され」、諸施設を移設する形で「洛陽に伝統的首都機能が復興された」という（同書二四～二六頁）。

先の「齊王外伝」にもある通り、張全義による復興は洛陽城全体や近郊まで含む広域を範囲としたものではなく、黄巣らの侵攻に際して築かれた「三小州城」中の「中州一城」に始まる限定的なものであった。水利施設の新設などといった事跡が見られないことからも、その復興の実態を

表2　諸葛爽配下諸将

人名、生没年	履歴、諸葛爽との関連。
張全義	本論で詳考。
劉経	爽の死後、張全義・李罕之とともに行動（『旧五代史』巻15、李罕之伝、など）。
王虔裕	瑯琊（沂州）臨沂県の人、（宋州）楚丘県に家す。「少有膽勇、多力善射、以弋獵為事」、874-879に爽に帰す（『旧五代史』巻21、王虔裕伝）。
牛存節（853-912）	青州博昌県の人。爽の「郷人」、879年に爽に帰す。爽の死後、朱全忠に帰す（『旧五代史』巻22、牛存節伝）。
李罕之（842-899）	陳州項城県の人。「世田家」、儒学を学ぶも大成せず、僧→滑州酸棗県で亡命に→黄巣軍に参加、帰順して光州刺史に。蔡州の秦宗権に攻められて項城に戻り、爽に帰す（『旧五代史』巻15、李罕之伝）。
李瑭	李罕之の部曲。諸葛爽の死後、李罕之と不和となる（同上）。
郭璆	李罕之の部曲。諸葛爽の死後、李罕之と不和となり、殺害される（同上）。
楊師厚（?-915）	潁州斤溝鎮の人。「善騎射、以勇猛聞名」、李罕之の部将。後に朱全忠に帰す（『旧五代史』巻22、楊師厚伝）。
李鐸	李罕之の部将。後に朱全忠に帰す（『旧五代史』巻22、楊師厚伝）。
何絪	李罕之の部将。後に朱全忠に帰す（『旧五代史』巻22、楊師厚伝）。
李建及（864-920）	本名は王建及。許州の人。李罕之に事え、「驍勇者百人」として李克用へ贈られる（『旧五代史』巻65、李建及伝）。
符存審（862-924）	本名は符存。陳州宛丘県の人。父は陳州の牙将。「少豪俠多智算、言兵家事」、俘囚となるも旧知の妓女の協力で生還したとの逸話あり。879年に「河南盗起、存審鳩率豪右、庇捍州里」。光州刺史となった李罕之に帰し、885年、李罕之に従って爽に帰す。爽の死後には李克用に帰す（『旧五代史』巻56、符存審伝。山根2012）。

過大視することには慎重であるべきだろう。なお、中州城の範囲は定かでないけれども、張全義自身の私第は洛陽の南市東南の会節坊にあり⑧、五代北宋を通じて洛陽では官人の居住地が同じく南市周辺に展開したと見られること（妹尾一九九七―B、八九～九〇、九六～九七頁）からも、洛水以南の東南部一帯を囲んだものと思う。

本節の最後に、新旧五代史の列伝を中心に張全義と関わった者を探れば、彼らの中から「河南・洛陽の僚佐」をリクルートした張全義の手法がうかがわれる（表3参照）。彼らは総じて洛陽への移住者・寄寓者で（②、④、⑤、⑥）、唐末すでに地位・名声を得ていた者（③、⑤、⑥）と、それらを未だ得ず科挙応試するなどしていた者（①、②、④）とに大別される。前者を援助して築いた縁故を用い、応試・任官などの局面で後者への間接的支援を図って、さらには彼らとの婚姻をとりむすび（①、②、⑥）重層的な人的結合をはりめぐらせるというのが、彼らを「厮僕」とした張全義の支配のあり方であったといえる。

表3　編纂史料から知られる張全義の関与・起用した人物

人名、生没年	履歴、諸葛爽との関連。
①張衍（?-912）	張全義の姪、猶子。実父は戦場で死亡。「衍楽読書為儒、始以經學就舉、不中選。時諫議大夫鄭徽退居洛陽、以女妻之、遂命応詞科、不數上登第」。唐昭宗の下、張全義の功から校書郎→左拾遺→翰林学士。後梁太祖の下では考功郎中→右諫議大夫。「衍巧生業、楽積聚」（『資治通鑑』巻268、乾化2年正月甲子、『旧五代史』巻24、張衍伝）。
②鄭珏（?-930）	唐昭宗朝の宰相鄭綮の姪孫。父の鄭徽は張全義の下で河南判官に。898～900年に登第、弘文館校書→集賢校理→監察御史。後梁では起居郎→禮部侍郎、「張全義皆有力焉」（『旧五代史』巻58、鄭珏伝）。「少依（張）全義居河南」とも（『新五代史』巻54、鄭珏伝）。姉妹の一人は張衍に嫁ぐ（『旧五代史』巻24、張衍伝）。
③李敬義	李徳裕の孫。唐末「乃無心仕宦、退帰洛南平泉旧業。為河南尹張全義所知、歳時給遺特厚、出入其門、欲署幕職、堅辭不就」。898年には、李徳裕の愛した平泉別墅の怪石が張全義の監軍を務める宦官の下にあると知り、その返還交渉を張全義に依頼（『旧五代史』巻60、李敬義伝）。
④李專美（883?-946?）	京兆万年県の人。曽祖は光禄卿、祖父は尚書庫部郎中で自らも文を学んだが、父が昭宗朝で科挙応試に失敗、これを恥じ以降「文場に遊ばず」。貞明中（915～920）、張全義に奏され陸渾尉に。許州舞陽県令となって政声あり。後唐天成中（926～929）、安邑榷塩使李肅に辟され推官となり、後唐末帝にも直言、宣徽北院使に（『旧五代史』巻93、李專美伝）。
⑤李渥	唐末の户部侍郎。「寓居雒都、素為全義所禮、光化三年（李）渥為禮部侍郎知貢舉、（張）全義以書、薦託（張）珏方擢第（『冊府元亀』巻828）。
⑥李肅（?-960）	建州の人（『資治通鑑』巻286、天福12年正月癸丑）。「自雍之梁、齊王（張全義）見之、愛其俊異、以女妻之」。後、制置安邑解県両池塩利、晋昌節度副使など（『洛陽縉紳旧聞記』巻2、「李少師賢妻」）。洛陽の思順坊に私第有り、「肅仕唐、歴五代、至建隆初卒」（『河南志』巻1、長夏門街之東第一街、思順坊）。
⑦唐鴻	張全義の行状を撰す（『洛陽縉紳旧聞記』巻2、「斎王張令公外伝」）。『唐鴻集』5巻あり（『宋史』巻208、芸文7）。

以上の編纂史料による理解は、墓誌史料によってどう覆り、あるいは補完されるだろうか。次節にて考察する。

新出史料から見る張全義一党

管見において張全義一党に関連する墓誌とは、表4に埋葬年順でまとめたA～Iである（以下、これらのアルファベットにより史料を示す）。Bについては雷聞氏の紹介論文により（雷二〇一三）、それ以外は周阿根『五代墓誌彙考』（黄山書社、二〇一二年）に主に依拠しつつ、他の墓誌集成など[9]から確認した。これらに基づき作成した家系図が図1である。以下、墓誌からうかがわれる論点について、行論の便からそれぞれ述べていこう。

【張全義一党の消長】

彼らの中核というべき張氏同族集団の墓誌、表4のD・G・Hからは、その消長が端的にうかがえる。

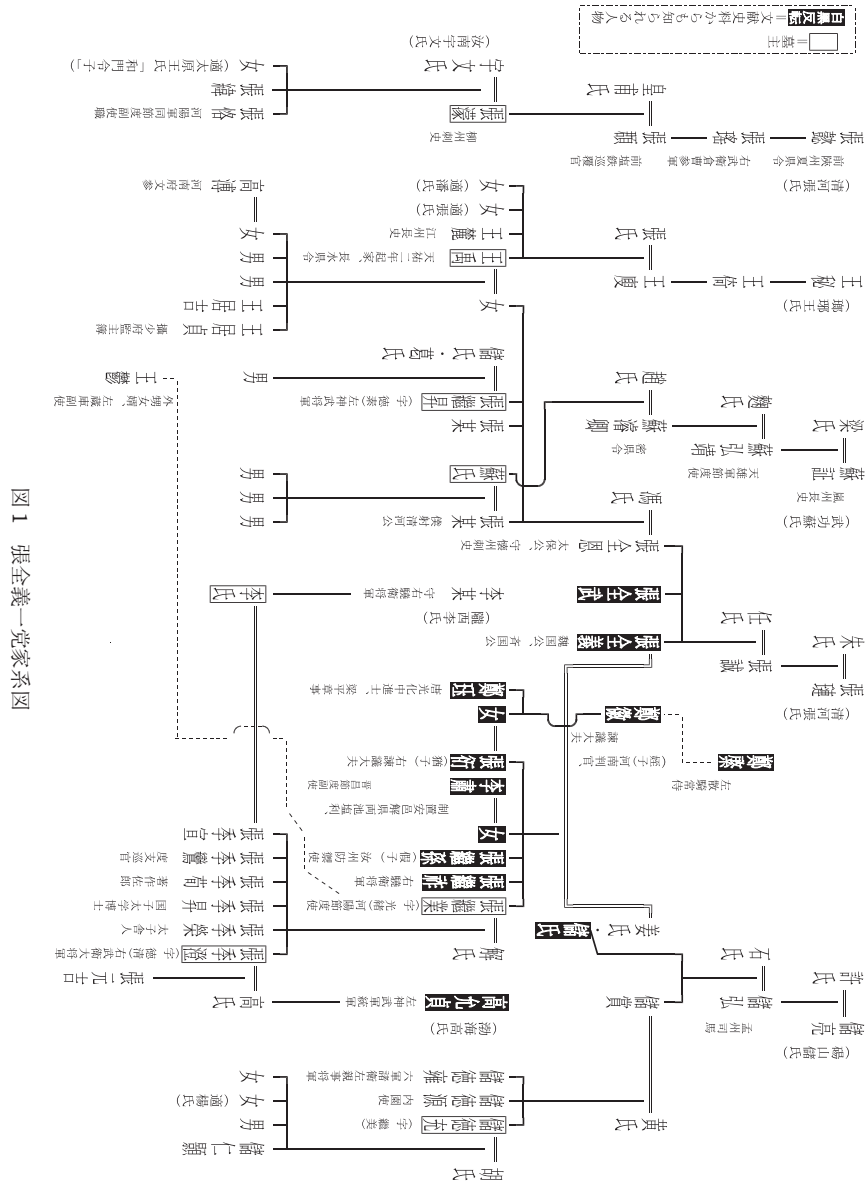
まず、全義の父張誠・祖父張璉について、

表４　張全義一党に関する墓誌、その概要

墓誌名称	撰者その他（□は人名）	生年～卒年、死亡地点	埋葬年、埋葬地点
A）張濛墓誌	朝議郎前行武衛長史任光嗣撰、孤子張緯書、李仁瑋鐫字	856 ～ 916 年 1 月、私第	916 年 2 月、河南県梓澤郷宣武原（先塋は洛陽県清風郷）
B）程紫霄墓誌	聴四子弟子前河南府録事参軍伏琛謹記	855 ～ 920 年 7 月、?	920 年 7 月、邙山三清観東北隅
C）儲徳充墓誌	朝散大夫河南府司録参軍兼殿中侍御史柱国伏琛撰、将仕郎前守河南府福昌県主簿呉仲舉書並篆	874 ～ 920 年 10 月、?	920 年 12 月、壽安県甘泉郷木連村
D）張繼業墓誌	将仕郎前尚書屯田郎中充河南府推官賜紫金魚袋唐鴻撰、外甥女婿左藏庫副使朝散大夫守太府小卿柱国賜紫金魚袋王鬱篆蓋、河南府随使押衙兼表奏孔目官銀青光禄大夫検校国子祭酒兼御史大夫上柱国趙榮奉命書	872?～925 年?、洛陽私第	925 年 2 月、河南県徐婁村（先郡夫人（母姜氏）塋之南隅）
E）張君妻蘇氏墓誌	将仕郎検校尚書屯田員外郎守河南府司録参軍緋魚袋王禹撰	876 ～ 925 年 5 月、洛陽章善里之私第	925 年 9 月、河南県梓澤郷宋村（先塋）
F）王禹墓誌	前攝河南府長水県主簿将仕郎秘書省校書郎李鸞撰並書	882 ～ 933 年 3 月、洛邑之第	933 年 11 月、河南県平楽郷杜翟里
G）張季澄墓誌	弟張季鸞篆蓋、門吏中大夫尚書兵部侍郎柱国賜紫金魚袋致弘農楊凝式撰、前河陽随使押衙銀青光禄大夫検校国子祭酒兼監察御史柱国郭興書	898 ～ 935 年 7 月、洛都永泰里之私第	936 年 2 月、河南県金谷郷徐婁里（先塋）
H）張繼昇墓誌	門吏太中大夫守礼部尚書柱国賜紫金魚袋致弘農楊凝式撰、将仕郎前守嬀州録事参軍劉珙書、鐫字人韓延密、賈知遠	896 ～ 939 年 10 月、洛京之私第	939 年 12 月、河南県梓澤郷宋村（大塋）
I）張季宣妻李氏墓誌	文林郎前守懐州獲嘉県主簿胡熙載撰	?～940 年 2 月、洛京私第	940 年 11 月、河南県永楽郷徐婁村（先太保（張繼業）塋に附す）

目立った事跡はどの墓誌にも見られないことから、「世よ田農を為す」（『旧五代史』張全義伝）というのは事実であったと見て間違いなかろう。全恩なる実弟の名はこれらの墓誌で初めて明らかになったものであり、李克用に敗れ捕らわれて太原に居住したという全武（『新五代史』張全義伝）とともに、唐昭宗からの賜名であった「全義」（『冊府元亀』巻八二五）のうち「全」の字を兄弟で共有し、排行も整えていたことが確認できる。

洛陽防衛・復興の詳細については、先の「齊王外伝」のような具体的記述は見当たらない。一方で、張全義の長子張繼業の墓誌（D）には、九〇四年以降、鄆・宋・鄭・亳・


四集団
一文字姓から西へ向かった人物
□ 王室
張敬達（張敬達）
張彦超（張彦超）
張彦成（張彦成）
張全義（張全義）
張全義（張全義）
張全義（張全義

淄・沂など周辺諸州の長官や河陽節度使を相次いで務めていく彼が、すでに確立していたらしき父の名声をつぎながら「仕者は其の門に踵るを得ざるを憂え、農者は其の野を耕すを得ざるを慮り、工者は百廛の市に踴躍し、商者は四達の衢に鼓舞す」として迎えられた、とある。一見無個性な美辞ではあるけれども、多様な流民の定着化という張全義の施策の本質を表していると思う。

その子張季澄の墓誌（G）では、全義・繼業の業績が綿々と詠われた後、後唐支配下での墓主自身について「或いは経史を討論し、或いは琴樽を賞翫す」、「而して又た釋氏に心を帰す」とあり、洛陽自体の社会的復興の進展、張氏同族集団の富裕化をうかがわせる。その上で、張季澄の埋葬の翌年（九三七年）に反乱への関与から誅殺される張繼祚その人が同墓誌では「公の仲父」として明記されていること、そしてこれとは対照的に、その誅殺後の撰述である「張繼昇墓誌」（H）では、張繼祚どころか張全義の事跡さえも一切記されず、張全恩の系統のみに慎重に筆がとどめられていることは、張繼祚の一件が張全義一党――すでに張全義その人は亡いが――に与えた影響を物語っていよう。張季宣への賛辞に付された「青史すら猶お新たにす、必ずや公侯の位を復せん」（I）との願望は、ついに果たされることなく終わった。

なお、墓誌E・Gから知られるように、彼らの私第はやはり洛陽城の東南に位置している。

【張全義麾下の諸官僚】

「河南・洛陽の僚佐」の具体像は墓誌から明瞭に見てとることができる。また、個々人の詳細は明らかにし難いものの、墓誌の撰者・書者の多くが河南府の幕僚や県官であることも、張全義麾下の行政官の陣容、彼ら相互の密なる人的結合を示すものといえる（表4、撰者その他の項）。

もっとも早く張全義の麾下に入っていたことを確認できるのが「張濛墓誌」（A）の張濛の事例である。曾祖父は陝州夏県令、祖父は右武衛倉曹参軍、父は塩鉄巡覆官であったといい、「少くして儒学に勤め、将に郷挙を修めんと」していたところ、いまだ懐州刺史であった張全義が「将に勲業を建てんとして士を求めるに切なり。乃ち早に其の名を知り、即ち召して麾下に居」させた、という。以降は張全義の下で財政職を担当し、その銘其四にも、「民賦兵籍、咸な能く之を理す」とたたえられている。長子の恪は河陽軍同節度副使、娘の一人も「和門（軍人）の令子」であるという王氏に嫁いでいる。軍・財両部門への近しさを強く感じさせる、洛陽に墳墓を持つ家系であるとともに、張濛自身は科挙受験者であったことにも留意したい。

ついで、洛陽に入ってからの張全義の麾下について知られるのが、「張君妻蘇氏墓誌」（E）に記される蘇氏の父、蘇濬卿の事例である。「齊王（張全義）洛師を節制するの始めに当たりて、太保公（張全恩）分れて兵戎を総し、河上に控臨す。時に密邑大夫（蘇濬卿）孟州に糾せられ、是れを以て姻好を議するを得」た、という。密県は河南府東南の一県であり、張全義の洛陽到来後にその県令となったというなら、「齊王外伝」に語られる洛陽各県の県令の一人が彼であったことになる。

張全恩の女をめとった王禹（F）は天祐二年（九〇五）という唐最末期の科挙合格者で、許州扶溝県主簿・緱氏県令を務めた後、張全義の知遇を得て澠池県令・河南府録事参軍・長水県令を歴任する。県令としての赴任先はいずれも河南府内であり、張全義一党内部の「河南・洛陽の僚佐」の典型と見ることができよう。

先述の文献史料において張全義の下に早期に加わっていたのは、桑維翰の父で「客将」であった桑拱（『旧五代史』巻八九、桑維翰伝）と、鄭珏の父で河南判官となっていた鄭徽（表3の②）であった。鄭徽のおじである鄭棨も科挙合格者であって家は貧しく、本来は宰相に登りうる人物ではなかったという（『旧唐書』巻一七九、鄭棨伝）。李徳裕の孫で、張全義に援助を求めつつもその幕職に就くことは固辞した李敬義の対照的事例（表3の③）を見ても、これら唐末の科挙受験者層、下級地方官層こそが、張全義の下に集った者たちであったと思われる。そして、懐州・洛陽などに流寓した彼らを麾下に加えることは、実は洛陽到来以前から張全義によって行われており、彼らとの婚姻関係も結ばれてゆくのであった。

【洛陽遷都との関連】

本論の区分でいう第二期、張全義一党の勢力拡大にとって、長安から洛陽への遷都が大きな意義を持ったであろうことは想像に難くない。先に見た張氏同族集団の墓誌の中でも特に「張繼業墓誌」（D）は、「既に官業彰らか」であった墓主が遷都を機に「仍お軍聲を振わせ」、六宅使・大内皇牆使に登ったと記述している。では、張氏以外の立場から見れば、その実態はどのようであっただろうか。

「程紫霄墓誌」（B）は、二〇一三年時点では洛陽で「一位私人之収蔵」する墓誌で、墓主は道教史において唐宋間の「師承譜系」の鍵となる道士であるという。本墓誌によって、右神策軍管征馬都将の父をもつこと、張全義の推薦で「道玄先生」の号を得、壽州團練使張昌孫[10]の保護をうけ洛陽で活動していたことが明らかとなった（雷二〇一三）。

雷氏も指摘するように、父から「老子経」を授けられ長

安で高位を得ていた程紫霄が洛陽に東遷することとなったのは、長安が唐末に被った破壊と洛陽遷都とが背景になっていたと見て間違いなく、先の表3に見られた諸人への支援と同様のそれが、程紫霄に対しても行われていたものと思われる。これが、「羅綺を衣ず、心に釈・老を奉じて左道に溺れ」なかったという（『旧五代史』張全義伝）、張全義の信仰の実態であったと思う。また「聴四子弟子」との自称や文面から、程紫霄に道教を学んだ者と知られる同墓誌の撰者前河南府録事参軍伏琛は、「儲徳充墓誌」（C）の撰者でもあり、張全義に従う「河南・洛陽の僚佐」にもこうした宗教文化に親しむ者がいたことをうかがわせる。

また、墓誌G・Hの撰者たる楊凝式は、八七三年生～九五四年没、華州華陰県の人にして唐末五代の代表的書家である。父の渉は唐末・後梁の宰相、自身は奔放奇矯な行動で「狂」「楊風子」と評され、洛陽の寺観に多くの書を残した（石田一九八一）。すでに張全義自身は没して十年以上後のこれら墓誌の撰者に彼を起用できること、そして、程紫霄の事例もあわせて考えれば、唐代長安の文化を五代洛陽で保護・継承した存在としての張全義一党の歴史的役割を認めるべきであろう。

【朱全忠との関連】

先にもふれた通り張全義は、各地と中央をつなぐ宋代文臣官僚制の起点とも評され（佐竹一九九二）、洛陽をこえた広域との関連・連絡の如何にもその考察の意義が認められる存在である。唐末から後梁において、この問題は特に朱全忠個人との関連の如何として問うことができよう。

ここで重要な鍵となる史料が「儲徳充墓誌」（C）である。だがまずは行論上、墓主の姑、墓誌中にいう「魏国荘恵夫人」に当たる張全義の妻儲氏について、やや詳細に説明せねばならない。

従来の諸編纂史料による限り、儲氏は張全義唯一の正妻と解される。乾化元年（九一一）年七月には張全義の私邸を訪れた朱全忠によって陵辱されながら（『通鑑』巻二六八、同年同月辛丑）、夫の忠誠に朱全忠が疑念を抱くや自ら交渉に乗り出し、時には夫のため朱全忠を面罵してこれを圧倒するなど、「明敏にして口辯有り」と称賛される女傑であった（『新五代史』張全義伝）。

しかし劉連香氏の指摘するように、張氏同族集団の墓誌D・G・Hのいずれでも、張全義の妻は「姜氏」と記されている。また編纂史料を再確認すると、張全義の正妻の卒年はおそくとも九二一年までというものと、九三五年というものとの矛盾する二案が見出され、張繼業らの実母で

あった姜氏は九二一年までには死没し、儲氏は後妻または妾として迎えられ、九三五年に没した、と解されるという（劉二〇〇四）。

一方で後梁においては、朱全忠の荒淫の犠牲者という形で、儲氏に類似する立場の女性の姿が散見される。たとえば知崇政院事敬翔の妻劉氏は、唐末の戦乱下において黄巣配下の部将の尚讓→武寧節度使の時溥→朱全忠らの下を「妓室」として遍歴し、前妻と死別していた敬翔に下賜された女性であった。敬翔は朱全忠から「軍謀政術、一に以てこれに諮る」との信任を得た人物であったが、劉氏も藍田県令の父を持ち一定の教養があったと思われ、下賜された後も「太祖の卧内に出入し」「太祖の勢を恃」んで敬翔を威圧、「其の下、別に爪牙・典謁を置き、幣を書し使を聘い、藩鎮に交結」したという（『旧五代史』巻一八、敬翔伝）。若干の飛躍をあえてして、儲氏も劉氏と同様に元来朱全忠の下にあり、後に張全義に下賜された女性であったと想定すれば、両者が張全義の私邸で公然と「密通」し、かつまた朱全忠が儲氏の面罵に苦笑しつつ引き下がったという一連の経緯も、自然なものとして理解できる。

その上で取りあげたい史料が、先述の「儲徳充墓誌」なのである。劉連香氏の研究などでは参照されていないこの墓誌の墓主は、輝州（宋州）碭山の人、父は孟州司馬兼御史大夫で、「族は本より高強にして家は唯だ純粋なり」という。墓主自身については「圯橋に剣を学」んだとも、またその銘の二に「書を杏壇に誦し、剣を燕市に学ぶ」ともあり、圯橋は張良が苦心の末に兵書を授かった場所、燕市とは荊軻が飲みふけった場所であった故事をふまえれば、剣客的・任侠的とも評すべき前半生への評価と解せられる。黄巣の長安入城後には父から「吾が血属既に多し、汝方に齠齔、尤も須く武を習うべし」と言われ、「府君 有力なること虎の如く、剣 剸犀というべし。跬歩として離れず、晨昏 定省す」とある一方、長じても官僚機構上の実職と思われる肩書きのない墓主は、同族集団内部の身辺警護に生涯当たった人物ではなかったか。

そして彼ら一族が「家を郟鄏（洛陽）に徙す」契機となったのが、「夫に従い京洛を撫寧」していた、魏国荘恵夫人たる墓主の姑、すなわち張全義の夫人儲氏であった。これより一族は「累ねて渥澤に沐し」たといい、事実墓主の弟らは内園使・六軍諸衛左親事都将に充てられている。友永植氏による唐代内官・宋代武班官研究によれば、内園使とは朱全忠によって唐末にその担い手たる宦官が虐殺されたという内官のひとつであり、また六軍諸衛とは、この宦官掃討に際して朱全忠に協力した崔胤が、旧宦官指揮下の兵力を吸収して結成した「六軍十二衛」の下にあったと思わ

れる。すなわちこれら儲氏一族こそ、宦官に代わってその職務を果たすことになる「朱全忠之腹心」「彼における家産官僚的な人材」（友永二〇〇八、八～九頁）であった。

以上の事柄を儲氏の側から見れば、彼女はこれら同族集団をその背後に擁し、また、宋州碭山の出身という、朱全忠やその皇后張氏[11]との同郷関係さえ持っていたことになる。すなわち儲氏は単に自らが胆力ある女傑であったというのでなく、張全義の下に在りつつ、独自の実力・権力の基盤をも備えていた。それは、夫との関係においては対照的な敬翔の妻劉氏が有したものに類する、幕僚集団とも見まがうほどに拡大された家政機構だったのではないか。

実はこのような機構を運用した夫人の例は、五代前半において劉氏以外にもはるかに好意的な筆致の下に見出すことができる。それが、本論では再三引用した「齊王外伝」に続き、張齊賢『洛陽搢紳旧聞記』巻二に見える「李少師賢妻」の記述である。同記事では、表3の⑥にも示した李少師こと李肅の経歴において、彼に嫁いだ張全義の一女たる張氏に大いに功があったと謳う。彼女は平生から「夫と院を別にし、李公の院姫妾数十人なれば、夫人も亦た数十人」といい、夫院の動静をうかがって誤りがあれば正した。後晋以前のこと、官庫の物品を盗用したという夫への讒言を独自に察知し、独力にて彼を救ったとも記されている。

そもそも『洛陽搢紳旧聞記』の撰者張齊賢は、かつて李肅の門下に客となること久しく、李肅の死に際してはその葬事も営んだという（『宋史』巻二六五、張齊賢伝）。そのような彼が称えつつ述べた「賢妻」の様相が、先の敬翔の妻劉氏のそれと通底するというのは、こうした女性の行動と彼女らの有した拡大型家政機構が、五代前半の洛陽・河南において広く見られたことの反映ではないか。劉氏に関する記述が「当時の貴達の家、従いて之に效う。敗俗の甚だしきなり」（『旧五代史』巻一八、敬翔伝）と結論するのは、後梁への歴史的批判を優先させた後世の視座が、社会的背景と劉氏という一事例からの影響とを取り違えた結果であると思う。

そして、朱全忠の下にいたその他の女性たちも、同様の背景を持っていたことが疑われる。朱全忠の息子の一人で父から最も期待された朱友文の妻王氏も、日常的に朱全忠の傍らに侍りつつ、義父と夫との連絡役を務めていた（『通鑑』巻二六八、乾化二年（九一二）閏五月）。同記事では他の息子、朱友珪の妻張氏もともに「朝夕、帝側に侍」しており、さらに「諸子 外に在りと雖も、常に其の婦を徴して入侍」させたとあることから、これが息子たちの夫人の多くに及んだ処遇であったと知られる。かくも多数にのぼる事例を、すべて朱全忠個人の性的嗜好のみによるもの

と解するのは、やはり後梁に対する積年の歴史的評価の偏向と言わざるを得ない。[12] あるいは当初彼の嗜好に発したものであったとしても、これらの女性たちが実質的に朱全忠と臣下・息子らとの連絡・調整役を果たしていたことは認める必要があると思う。

まとめ

これまで述べてきたところを本論の所期の目的から総括すれば、以下のようである。

まず「沙陀系王朝」論への応答として確認すると、張全義一党の民族的特性はやはり沙陀族やソグド系のそれではなかったと思われる。洛陽でも多数出土しているソグド系勢力の墓誌銘から知られる彼らの居住地・埋葬地（福島二〇一三）と、本論に見た張全義一党のそれとは空間的には重なっているにもかかわらず、張氏同族集団やその配下・婚族にもそうした特徴は見られない。

しかし逆に、一党が初期に依拠した職掌においては、沙陀系王朝の中心となった勢力とも類似する点が見出される。というのも、先の墓誌史料から張全義の最も早期の幕僚と知られた張濛は財政運営上の能力においてこそ称賛されており、その父も塩鉄巡覆官で、張全義自身にしてからがそもそも黄巣政権下では「水運使」についていた。同政権下での詳細は不明であるけれども、水運使と言えば唐後半では六城水運使・代北水運使の存在が知られている。前者は霊州から黄河を下って勝州・振武軍へと連なる地域を管轄とした北辺財政使職で（丸橋二〇〇六、九八～一〇〇頁）、後者は河東から北辺方面の軍糧補給体制を担い、唐末にこれを占拠して財源としたのが李克用の勢力に他ならなかった（西村二〇〇八、二〇〇九）。民族的には異質な沙陀族・ソグド系勢力と張全義一党とは、唐末華北の財政使職というその制度的背景においては、双生児のごとき関係にあったとも言えよう。

一見農本主義的な張全義一党の出発点がこうした職掌にこそあったとすれば、洛陽という局所における彼らの復興への営為は、むしろ多州間での連絡と物資の輸送とを前提としたものであったととらえ直すことができる。それは、宋代文臣官僚制の起点として彼らをとらえる上でも重要な意味を持とう。また、本論で見出された彼ら後梁政権下の諸勢力の特徴、すなわち皇帝朱全忠との連絡・調整役を務めた妻妾とその拡大型家政機構についても、いっそう大きな意義を認める必要性が生じてくる。夫とその妻妾が外部への連絡体制を複線的に有することは、敬翔の妻劉氏・張全義の妻儲氏・李蕭の妻張氏において、それぞれ異なる形

での男女関係として現れ、記述されているけれども、社会と官僚機構の双方が荒廃を極めた唐末の状況を思えば、これこそが当時の開封・洛陽間で一府一州をこえた統合をかろうじて成立させていたものと思われるからである。

さらにいえば、張全義一党の特色であり限界でもあった、同族経営的性格の評価にも注意するべきであろう。法の運営に公正を欠き、幕僚も「厮僕」のようであったという彼らの姿は、中国史上に普遍的な貪官汚吏の一典型とも見える。しかし彼らは平穏な時代に任地で易々と賄賂を手にした一官僚であったわけではなく、全国的な官僚機構が破綻した唐末にあって、百戸にまで人口の減少した洛陽を拠点として出発した存在であった。軍事的・財政的には常に周囲の勢力に従属する反面、洛陽の復興においては常に主体的・能動的であった彼らの行動は、同族を中心とするものであればこそ可能であったろうし、「良玉の微瑕」（『旧五代史』張全義伝）と惜しまれた既述の欠点も、官僚機構と洛陽の社会経済が相応に復興した後にこそ問題化したものであった。

整備された官僚機構の下では「腐敗」「敗俗」につながるこうした性格こそ、張全義夫人儲氏らに見える女性の政治的役割や儲徳充の任侠的性格もふくめ、危機の時代にあって発揮された社会的復元力の源泉であった。それが沙陀・ソグド系以外のいかなる民族的特性に由来するかは措くとして、後梁を北宋へとつながる再建の始期ととらえる時、彼らの歴史的個性と役割を看過してその時代史を叙述することはできないと考える。

参考文献

石田　肇（一九八一）「楊凝式小考――付年譜稿――」（『書論』一九、一四一～一五四頁）

石見清裕（二〇〇五）「沙陀研究史―日本・中国の学界における成果と課題」（『早稲田大学モンゴル研究所紀要』二、一二一～一三八頁）

岡崎文夫（一九九五）『隋唐帝国五代史』（東洋文庫。同書の編者秋月観暎氏によれば、講義としての初出は一九三七～一九三九年という）

久保田和男（二〇〇七）『宋代開封の研究』（汲古書院）

佐竹靖彦（一九九〇）『唐宋変革の地域的研究』（同朋舎）

佐竹靖彦（一九九二）「朱温集団の特性と後梁王朝の形成」（『中央研究院歴史語言研究所会議論文集之一　中国近世社会文化史論文集』、四八一～五三〇頁）

妹尾達彦（一九九七―A）「都市の生活と文化」（『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』、汲古書院、三六五～四四二頁）

妹尾達彦（一九九七―B）「隋唐洛陽城の官人居住地」（『東洋文化研究所紀要』一三三、六七～一一一頁）

寺地　遵（一九八三）「五代北宋政治史概説」（今堀誠二編『中

国へのアプローチ―その歴史的展開―』、勁草書房、九七～一二九頁）
友永　植（二〇〇八）「唐供奉官考」（『（別府大学）史学論叢』三八、一～一二頁）
西村陽子（二〇〇八）「唐末五代の代北における沙陀集団の内部構造と代北水運使――「契苾通墓誌銘」の分析を中心として――」（『内陸アジア史研究』二三、一～二四頁）
西村陽子（二〇〇九）「唐末「支謨墓誌銘」と沙陀の動向――九世紀の代北地域――」（『史学雑誌』一一八巻四号、五一三～五五〇頁）
福島　恵（二〇一三）「「洛陽景教教幢」と洛陽のソグド人――「感徳郷」はソグド人聚落か」（森部豊『ソグド人の東方活動に関する基礎的研究』、平成二一～二四年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、八三～一〇四頁）
丸橋充拓（二〇〇六）『唐代北辺財政の研究』（岩波書店）
森部　豊（二〇一〇）『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』（関西大学出版部）
山根直生（二〇一二）「淮陽県出土「朱贍墓誌銘」に見る九世紀忠武節度使の動向」（『史学研究』二七六号、一～二〇頁）
雷　聞（二〇一三）「新見《程紫霄墓誌》與唐末五代的道教」（『隋唐遼宋金元史論叢』第三輯、上海古籍出版社、一一五～一二七頁）
李　猷奇・張　欽波（一九九三）「五代後唐張繼業、季澄父子墓誌浅考」（洛陽市第二文物工作隊編『河洛文明論文集』、中州古籍出版社、四三〇～四五三頁）
劉　連香（二〇〇二）「張全義与五代洛陽城」（『洛陽工学院学報（社会科学版）』二〇―二、九～一二頁）
劉　連香（二〇〇四）「後晋張繼昇墓誌考」（『河南科技大学学報（社会科学版）』二二―二、二五～二八頁）
蘇　健（一九八九）『洛陽古都史』（博文書社）
陳　智超（二〇一一）「輯補『旧五代史・梁太祖本紀』導言」（『隋唐遼宋金元史論叢』第一輯、紫禁城出版社、二一三～二三三頁）

注

（1）「地主国家」として宋朝をとらえる理解については、佐竹靖彦氏の所論（佐竹一九九〇、七三五～七三八頁）をあげておく。

（2）兵権回収や中央集権化などではなく、契丹との対決という政治的選択と中華思想に基づくその理論武装について世宗を評価する研究は従来数少なく、岡崎文夫・寺地遵両氏のそれがあげられるのみである（岡崎一九九五、三四八～三五〇頁、寺地一九八三、一〇七～一一〇頁）。

（3）厳密に言えば張全義の洛陽への関与の始まりは、「蔡賊」孫儒を退けてここを占拠したことによる八八七年と、魏王への封爵などによる九〇七年との二説があり、この間に洛陽の長官であったという他の人物の名も複数あげられる（郁賢皓『唐刺史考全編』、安徽大学出版社、二〇〇〇年、六二一頁）。しかしこの間にも張全義の洛陽防衛・復興の事跡は記録されており、九〇五年にはこれを称えた詔勅も

出されている（『冊府元亀』巻二五、天祐二年八月）ことから、実質的には八八七年以降一貫して彼による支配がなされていたものと考えられる。

（4）張全義の忠誠に疑念を抱いた朱全忠に対する妻儲氏の言（本文で詳述）、反乱に関与した張繼祚の罪をその妻子までに止めるよう説いた李濤の上疏（『宋史』巻二六二、李濤伝）、など。

（5）『旧五代史』巻六三および『新五代史』巻四五の張全義伝。頻用するため以下本論では巻数は省略し、各書の張全義伝とのみ記す。

（6）こうした中で劉連香氏の論文二編（劉二〇〇二および二〇〇四）は、それぞれ従来の編纂史料と新出墓誌史料から張全義についての考察を展開しており、特にその同族集団について知る上で筆者も大いに参考とした。

（7）客将もまた節度使管下にはあるものの、その主な職掌は他藩からの使節などへの応対にあった。

（8）『旧五代史』巻六、後梁乾化元年（九一一）五月、『冊府元亀』巻二〇五、乾化五年（九一五）五月癸巳。また、唐末に張全義が移転させた洛陽の府廨は臨闤坊、張全義の祠堂・生祠は綏福坊、父が張全義の副将であった桑維翰の本貫は賢相坊（章善坊）にあったといい（『河南志』巻一、長夏門街之東第三街および第四街、各坊の条）、すべて洛陽城の東南に位置する。さらにまた「疑うらくは張全義の南州を保つ時、壘垣を築く所ならん」とされる福善坊も、南市の西に接している（同書同巻、長夏門街之東第一街、福善坊・福善坡）。

（9）洛陽市第二文物工作隊ほか編『洛陽新獲墓誌』、文物出版社、一九九六年、など。また各墓誌への考察について、李ら一九九三、劉二〇〇二、劉二〇〇四などを参考とした。

（10）張昌孫は、『旧五代史』巻五、梁太祖開平四年（九一〇）四月丙戌に「河南張昌孫」とある他、同書巻九の梁末帝貞明三年九月甲辰では壽州團練使に充てられ、翌年の九月乙未にもその名が見える人物である。張全義との関係を思わせるけれども、本論では特定できなかった。

（11）『旧五代史』巻一、梁太祖紀一、および『冊府元亀』巻一七、「梁祖張夫人」、によれば、両者はともに碭山の出身である。

（12）筆者も朱全忠の荒淫という歴史的実態そのものを否定するわけではない。朱友珪の母（姓名不詳）はもと亳州の營妓であり、同地に宿営した朱全忠により「召して侍寢す。月余、將にこれを捨て去らんとするに、娠を以て告」したという（『通鑑』巻二六八、乾化二年（九一二）五月丙寅の注）。しかし、彼の悪しき性癖の最たる証左と見えるこの事例でも、この女性は姓名も伝わらぬ天涯孤独の身と思われ、張全義の妻儲氏らとはむしろ相違性が顕著であることに注意すべきであると思う。